

米国メソジスト監督派教会女性海外伝道協会のイタリアにおける活動

ー日本との比較を通してー

齋藤元子

米国メソジスト監督派教会女性海外伝道協会 (The Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church 以下 WFMS of MEC と記す)は、「異教女性への伝道」を目的として 1868 年 3 月ボストンにおいて結成され、数多くの女性宣教師を異教の地へ送り込んだ。女性宣教師の派遣先は、インド・中国・日本がその多くを占めていたが、意外なことに、WFMS of MEC はイタリアへも女性宣教師を派遣していた。イタリアは、言うまでもなく、キリスト教国である。なぜ、WFMS of MEC はイタリアを活動の地に選んだのであろうか。

米国プロテスタント教会が海外伝道を積極的に推進した 19 世紀後半、イタリアを訪れたアメリカの教会関係者の多くが「ローマ教皇とカトリックの迷信の存在がイタリアを精神的・物質的に混沌とした国に貶めている」といった主旨の発言をしている。そのような認識を背景として、メソジスト監督派教会は「カトリックとの絆を断ち、イタリア人を新しく偉大なプロテスタント文明世界の文脈に導き入れる」という使命感を持って、1871 年一人の男性宣教師をローマに送り込んだ。WFMS of MEC は、この男性宣教師からの要請を受けて、活動を開始したのである。

1877 年、WFMS of MEC が経費を負担して、3 名のバイブル・ウーマンが採用された。これが活動の始まりである。バイブル・ウーマンとは、現地の女性であり、家々を訪ねて聖書を朗読し、女性たちを教会の礼拝へと勧誘する活動に従事した。1885 年に最初の女性宣教師が派遣され、1935 年までの 50 年間にイタリアで活動した女性宣教師は 16 名を数えた。ちなみに、1874 年の伝道開始から 1935

年までに日本に在住した WFMS of MEC の女性宣教師は 132 名だった。また、活動資金の点では、1887 年から 88 年にかけての金額を例にとると、イタリアが 4,518 ドル、日本が 45,827 ドルであった。これらの数値が示すように、WFMS of MEC のイタリアにおける活動は、日本に比して、かなり小規模であった。しかし、WFMS of MEC がインドと中国において力を注いだ病院の設立と医療宣教師の派遣は、イタリアと日本においてはともに実施されておらず、女学校を創設し女子教育を介しての伝道活動が中心であった点は共通している。

WFMS of MEC のイタリアにおける活動は以下のように推移した。バイブル・ウーマンの家庭訪問による伝道に始まり、信者の自宅を使用した小さな私塾のような day-school、孤児院と寄宿制学校、上級学校の開設と規模を広げ、着実な発展を遂げた。また、教育の場である校舎も、ビルの間借りから一戸建ての借家、建物の購入、用地を取得しての新校舎の建設と拡大を見せた。しかしながら、第一次世界大戦勃発の頃から、活動に陰りが見え始める。寄宿制学校の閉鎖に次いで、ヨーロッパの諸外国からも生徒を集めていた上級学校も 1935 年に閉校となった。

WFMS of MEC がイタリアにおいて推進しようとした女子教育は、一時的な開花はあったものの、根を下ろすことができなかった。その原因は、カトリック教会との関係性ならびに現地の女子教育事情に対する認識不足にあったと考えられる。

まずはカトリック教会との関係性であるが、WFMS of MEC はカトリック教会に対し一貫して批判的な態度を取っている。イタリア在住の女性宣教師がアメリカの協会本部に宛てた書簡には「イタリアに短時間でも滞在すれば、カトリック信者の頑固な偏見や迷信がいかなるものであるかをたちどころに知ることができる。カトリック聖職者の墮落は、おそらく、世界中どこを探しても、イタリアに匹敵する場所はないであろう」、「カトリック以外の宗教に触れたことのない人々が、神の代理として尊敬す

べきであると教えられてきた聖職者たちの卑劣な人間像を知ることにより、不信仰へと導かれていくのは何ら不思議なことではない」といった強い口調の批判が展開されている。一方、カトリック教会も WFMS of MEC に対して非常に攻撃的であった。カトリック司祭からの非難や中傷のみならず、当時のローマ教皇レオ 13 世自身が WFMS of MEC 設立の女学校を抑圧するよう命令を出すという事態にまで至った。このようなカトリック教会との対立関係は、日本で活動した WFMS of MEC の女性宣教師たちが仏教建築の荘厳さを賛美し、日本人の自然を敬う姿に理解を示し、皇族の学校に英語教師として招かれていたのとは対照的である。

次にイタリアの女子教育事情に対する認識不足について触れたい。WFMS of MEC がイタリアにおいて女子教育を開始した 1870 年代、当地にはカトリック修道会の運営による相当数の女子教育機関が既に存在していた。また、ヨーロッパ諸国からも生徒を集めた上級学校は、留学生の出身地がデンマーク・スウェーデンといったプロテスタント国であり、カトリック文化圏の女性へのプロテスタント教育という目的に沿うものではなかった。一方、WFMS of MEC が日本において女子教育に着手した頃、明治政府は中等教育以上の男女別学を規定し、男子の中高等教育の整備を漸次進めている時期であった。WFMS of MEC は、女子教育政策が未整備で女学校のニーズが高かった状況を把握し、キリスト教教育・英語教育を柱とする独自の教育を展開して、日本の女子中等教育の基礎を築いたのである。そして、創設された女学校の多くが今も存在し、私学の一翼を担っている。

日本との比較からも明らかなように、WFMS of MEC のイタリアにおける活動は、現地の文化に対する親和性や現地の教育事情の把握が欠如していた。この点が、女子教育に特化した WFMS of MEC のイタリアにおける活動の継続を阻んだと考えられる。米国プロテスタント教会の女性海外伝道協会の中で、イタリアに女性宣教師を派遣したのはメソジスト監督派教会だけであった。この事実は、WFMS of MEC の活動が果敢な試みであったことの証左とも言えよう。

お知らせ

「ヘボンと幕末、明治のニッポン」展

(仮称) 2013 年 10 月 18 日～12 月 27

横浜開港資料館

「友愛の政治経済学をめぐって」

石部公男

9 月 8 日 (土) に横浜プロテスタント史研究会にお招きいただきまして、賀川豊彦の「友愛の政治経済学をめぐって」とのテーマで話をさせていただきました。「友愛の政治経済学」とは 2009 年 6 月にコープ出版 (株) より出されました書籍の名前です。この本は賀川豊彦により 1937 年ロンドンで出版された「Toyohiko KAGAWA, Brotherhood Economics」というタイトルの英文本を翻訳したものです。明治学院大学名誉教授・賀川豊彦記念松沢資料館館長の加山久夫氏と私で翻訳したものです。さらに神戸大学名誉教授・コープ神戸共同学苑学苑長の野尻武敏氏が大変丁寧に監修をしてくださったものです。

本来の原本は賀川豊彦が米国コールゲイト・ロチェスター神学校のラウシェンブッシュ基金の招きにより「Christian Brotherhood and Economic Reconstruction」とのテーマで 4 回にわたり講演をしたものを纏め、1936 年にニューヨークの Harper & Brothers 社から出版したのですが、今回翻訳した原本はその翌年、1937 年にロンドンで出版されたものを使用しました。賀川は 1935 年から 1936 年にかけての半年間、全米で講演旅行を行っており大変な盛況を博しました。日本では昭和 10 年から 11 年という時期でした。世界大恐慌の余波が癒えていない時期でもあり、賀川の渡米もニューディール政策で有名なルーズベルト政府の招きでした。この間、賀川は小さいものを入れると 500 回ほどの講演をこなしたということです。聴衆者も全体で 100 万人を越し大反響であったといわれています。この本は米国や、イギリスで英文として出版されたのみならず、すぐにドイツ語、フランス語、さらにはスカンジナビア語やヘブライ語、ヒンズー後、また中国語等にも翻訳され世界 25 カ国で出版されています。しかし日本ではこれまで邦訳がなされないままでした。思うに“日本人が書いた英文の本”という意味で翻訳の価値についての多少の偏見があったのかも知れません。また内容が国家体制や経済体制に関係するものであり、更に賀川がキリスト教徒という点から当時の日本で敬遠されたのではないかと個人的には推測しています。しかし賀川は小説「死線を超えて」を 1920 年、大正 9 年に改造社から上中下の 3

巻仕立て出版し、各版の合計販売部数は400万部に達したということです。当時の人にとって作家としても十分知られていたわけですから、それにも係わらずこの本がなかなか翻訳されなかったということは大変残念におもいます。今回、賀川がキリスト信仰に根ざし社会活動に身を献げた21歳の1909年（明治42年）から100年経過したことを記念し、「賀川豊彦献身100年」の記念事業の一環として翻訳出版をすることになったのです。

賀川は神戸の生まれでした。父は徳島の大庄屋の家柄でしたが幼少時に父母をなくし、徳島の本家に引き取られ中学卒業まで徳島で暮らしたのです。その間に英会話の教師でもある米人牧師の導きで受洗し、卒業後は明治学院に進学したのです。しかし、当時不治の病と言われた肺結核となり、残りの命を神と人のために献げるべく、生地神戸のスラム街で救貧活動に約5年間身を投じました。その間に結核は次第に回復し、第1次世界大戦の始まった1914年から17年にかけて米国プリンストン大学に留学したのです。帰国後も彼は社会活動に取り組みますが、留学後は単なる救貧活動ではなく、貧困者が出ないような社会を建設する必要があるとして防貧活動に力を入れるようになったのです。その結果として、協同組合の組織と制度およびその思想に着目したのです。それは単なる救貧でなく防貧のためにはこの制度が良いとの信念からだと思えます。

この翻訳本の監修者、野尻氏は日本の地域生協としては最も古いコープこうべの理事長でもありました。賀川は協同組合の理念こそがキリスト教信仰に基づく兄弟愛を具現する社会体制に合致したものであるとの思いを明確に持っていたのだと思えます。協同組合はキリスト教的人間愛、兄弟愛としての「友愛」、即ち Brotherhood の理念と一致し、その理念が経済社会全体に及ぶべきであると考え行動したと言えます。賀川の経済学は一般の経済学における理論とは少し異なり、主観的経済学としての心のあり方を重んじた経済学なのです。経済的な価値は人間の意識活動全体の基礎であり、唯心的立場に立っています。その意味ではマルクス主義に立った共産主義経済ある唯物論を否定しつつも資本主義経済下で労働者が人格を否定されるような経済社会についても否定をしているのです。経済社会のあり方としては人間相互の助け合い精神に根ざした協同組合組織が理想的なあり方だと主張しています。彼は「神の救いは個人の魂のためだけでなく、社会全体

のためでもある。神の愛の力を通して救われた人々は、今度は他の人々を救う努力をすべきであると私は考える」と、この本で記しています。協同組合についてはヨーロッパのギルド社会の例や、1844年英国マンチェスターに近いロッチデールの町で立ち上げられた生協の経緯やその意味、またその後20年以上経過して起こったドイツのライプハイゼン・システムなど多くの共同組合に関わる歴史とその意義につき語っています。重要な点はいくつまでも自発的な形での相互扶助を基本とした各種の共同組合組織が経済社会にとって大切であり、国家自体をも共同組合的国家を目指すことが、真の意味でキリストの愛にこたえる社会であるとしているのです。

現下の日本や世界経済や労状況を考える時、賀川のこのような思想は極めて大切な視点であると思えます。現在また将来の社会、世界のあり方に大きな示唆を与えてくれているものと思っています。

高橋五郎と私

—五郎の築いた言語の山に登りたい—

山下 英一

昭和九年生まれの私です。年齢は気になりません。今の日本の若い人が戦争の時代を生きてほしいと思っている。長生きして一つでも願いがかなえられる、一つでもわかるようになる。私にとって長いきとは年齢を忘れて夢中になることです。私は長い間、一人の米国人教師の日本を見る目を通して維新から明治の終わりまでを見てきた。フィラデルフィアに1843年生まれのこの神学生を生涯にわたり日本に引きつけたものについて知る興味を持っていた。

ウィリアム・エリオット・グリフィスという名の牧師希望の学生が日本の学校の教師になって行く。この一身上の出来事が結局において1928年の85歳まで長生きしその名を残すことになる。NO haste, no rest. これはグリフィスの座右の銘である。彼は自分にも人にもやり難いことは望まない。ただ誰よりもねばり強くことにあたる。代表作 The Mikado's Empire は1876年の初版以来、1913年の12版まで続き、その間も版ごとに時代状況の変化を述べて補遺を改める努力をしていた。と同時に28歳という若さの初体験から生まれた書物であった。グリフィス先生の解放的な精神にふれ合う福井の少年の

なかには先生を信頼し見習う生徒が出てきた。

いつの時代、いかなる場所にも青少年には青春がある。われらの高橋吾良〔五郎〕と福井のグリフィスは13の年齢差がある。とすればこの19世紀生まれの青年は日本人に新しい生き方をもたらした19世紀後半の子として20世紀に入っていく。この時代の少年から一人前までの生き方を類型してみると、多くは武士階級の出身。変化と同様の吹き荒れる廃藩のなかで物心両面の束縛から精神の自由が開け行く時代になっていった。グリフィスのいう日本にとって epochal years の真只中であつた。この年間に大政奉還、五カ条の誓文といった明治日本の揺籃期から廃藩置県、海外留学生、宣教師、信仰の自由、お雇い外国人、使節団派遣、条約改正といった転換期年代を通る。それを経て大日本帝国憲法、教育勅語の発布や農業生産物、医学、自然科学などにおける許容、変化、進歩の様相を示す近代国家の成立を見た。

垣根の取り払った藩を飛び出し、若者は明治新政府の置かれた東京、外国との出入口の横浜へと向かった。同じ道を柏崎の寒村で庄屋をしていた家をせがれ吾良もまた横浜へ向かった。そこで植村正久を知ったのが良かった。横浜の学校に入り、10月語学で身を立てる切っ掛けを持つに至る。五郎を教えて、そのエンサイクロペディア的能力に驚いた。その植村の紹介で吾良は S.R. ブラウンの秘書になり、やがて新約聖書の翻訳を手伝う。英語はもちろん、独、仏、ギリシャ、ラテン、ヘブライの言語は聖書翻訳を手伝ううちにおぼえる離れ技をやつてのけたのである。

高橋五郎の著書『英語教習法』1903年によると、「会話は学習の一部であつて外国留学ではもっぱら読解力をつけるべし。さらに自国の言語、文学、歴史、風俗にも通じておくべし」。この言語習得に必要な会話力と翻訳力と読解力についてグリフィスが同じようなことを言っている。彼は日本人学生のために科学と物理の翻訳書を作る企画で彼を助ける通訳を福井藩に依頼していたらしい。良く出来るという触れ込みで来た通訳だった。俸給は断然高く仕事はできないことが露見した。故郷への手紙にこのように書く。この人は聞き覚えの英語の知識しかなく、英語は上手に話すが欧米の文学のことは全く知らず童話以上のものは全く翻訳できない。

1891年、東京第一高等中学校で教育勅語奉戴式の折、内村鑑三が敬礼をしなかつたので話題になつ

た。教育とキリスト教の問題に発展し、「不敬事件」と言われて世間を騒がすまでになった。その二年後、哲学博士井上哲次郎が『教育ト宗教ノ衝突』を発表して内村の不服従を論じ批判した。これに対し高橋五郎は『排偽哲学論』を発表してクリスチャンを味方に論争、紙価を高からしめた。おそらく有名学者に噛みつく無名学徒の勇ましが魅力的だったのか。ここに五郎の雄弁がある。「官費にて多年独逸国に留学せし人にして斯くの如き事実をだも知らざるは、唯に其博言家たる名に愧ずべき而已ならず、之に資金を給したる吾人日本人民全体に対して不真面目の極みならずた」。

五郎の自信のよつて来たるもの、それは彼の語学力の他ならぬ。解読と読解は違ふようである。かれらには外国語は判じ物に近かつた。しかしそれは外国のことばであつた。廃藩で自家を飛び出した日本の若者をとりこにしたのは、ことばは覚えさえすればよかつた。身分にこだわらない。習う機会はいくらもある。そうして習得すればだれもがたちまち仕事に就ける。外国の本を日本語に通訳すれば翻訳。しかし論語読みの論語知らずのように哲次郎が「聖書には勅語が謳う忠孝の論理がない」と言つて取り上げたルカ福音書2章51節を吾郎が読めば「稼業の大工お捨て神としての天職に奉じていた矢先のイエスを見る」との拾ひ読み違い。「見れども視ざる」人が生ずるのだ。

ここまでは私の高橋五郎研究の途についたばかりの文章だが、終りに彼がグリフィスを尊敬していたことを知る手紙の部分をご披露してここで一休みいたしましょう。

Your valuable Mikado's Empire, a favorite of the reading public of Japan

Oct. 15th 1889

しんやくせいしよけんのに まこでんふくいんしよ

新約聖書卷之二「馬可傳福音書」について

鈴木 進

「馬可傳福音書」(木版、和綴70丁、もう筆、変体仮名混り文語文)に奥付がないが、その出版については以下の資料を手掛りとして特定することができよう。太政官譯者(正木護および関信太郎)報告、へボン書簡(1862年10月4日、71年9月4日)、S.R.ブラウン書簡(1872年6月24日、72年9月4日)、『奥野昌綱先生略伝並歌集』、W.E.Griffis,

Hepburn of Japan, 『新日本開拓者ゼー・シー・ヘボン博士』等。これらを総合すると、翻訳者は J.C.ヘボンおよび S.R.ブラウン、二人を助けて、日本文および版下は奥野が書いた。1872年9月下旬、横浜にて刊行。発行部数八千枚から一万部(らしい)。それらの費用は歯科医 W.G.エリオットの献金による。定価は一分(原胤昭の記憶)、であったことがわかる。なお、筆者は訳語が4箇所異なる二種類の版を目にした。版木は複数作られたのであろう。

「馬可傳」邦訳のテキストはヘボン書簡(1861年7月2日および64年2月10日)により、漢訳聖書(Bridgman・Culbertson 訳、上海美華書館)が基になった、と筆者は考える。そのことを次に訳文、訳語、それぞれ比較し、愚説の裏付けとしたい。

訳文については、訳者は日本人助手と共に、漢訳聖書を訓読した直訳的訓み下し文を基にして、さらにそれを和風の文に直すために以下のような工夫を加えたものとする。「馬可傳福音書」第一章十五節「云期已届矣神苦國邇爾宣悔改信福音」→「云く期已に届けり神 國邇し爾よろしく悔改の福音を

こくげん みて かみ くに

信ずべし」→「刻限は満り神の國はちかし汝らこころをあらためて福音を信ぜよといへり」。のように

(1) 動詞の位置など、語順を変える。(2) 日本語特有の敬語を加える。(3) 助詞、助動詞を用い文を繋ぐ。また時制を明示するためには欽定英訳も参照したらしい。(4) 名詞、代名詞の単数、複数の区別も King James Version のそれらと一致する。(5) さらに漢訳にはないが、文脈上必要と思われる箇所には接続詞(K.J.V.と一致)を補っている、等々。

訳語については、訳文を作るよりも大きな困難に直面した筈である。なぜなら、本来の日本社会、日本語には存在しなかった聖書世界の概念、キリスト教用語を、日本語をもって原意をいかに正確に書き表すべきか、それこそ聖書翻訳に伴う障壁であるから。造語や音訳も考えられるが、「馬可傳」の場合、その多くを中国語の訳語からの借用であった。それは漢訳聖書と「馬可傳」の訳語を比較検討すれば明らかであろう。ただし、中日両国の言語と文化に通じている訳者たちは、漢訳語をそのままには用いず、幕末、明治初期の日本語として受入れられるように

よげんしゃ

次のような工夫をしたと思われる。(1)「預言者」、

しゅ

「主」などは漢訳語をそのまま採用、音読した。

かみ くいあらた

(2)「神」「悔改む」など、訓読して和語とした(3)

でし あいさつ

「門徒」「問安」等、音読した語。(4)「殿」など漢

みや

訳一字であったのを「神殿」と二字にし、和風に置きかえた。(5)「士子」などの漢訳語は当時の日本

がくしゃ

語として馴染まないもので、それに近い「學者」を当てた。このように、漢訳語(字)はそのまま生かし、それと和語のふり仮名を組み合わせることにより用語のもつニュアンスを伝えようとした。

ヘボンは聖書和訳と併行して、日本語辞書の編纂を進めている。『和英語林集成』は、その当初の動機のひとつとして聖書和訳のため(1866年9月、ヘボン書簡)と、記している。それでは「馬可傳」の訳語と『和英語林集成』との関連はどのようなものであろうか。一例として「馬可傳」1章22節ひとびと

「人々そのをしえをおどろきあへりいかなとなれば

ひと ひとびと がくしゃ

権威をもちたる人のごとく人々ををしへて「學者」のごとくにあらざればなり」。ここに用いられている「いかなとなれば」を『和英語林集成』(再版,1872)に当たると IKANAREBA、イカナレバ same as Ikan to nareba の用例が載っている。筆者はかつて所属学会において『和英語林集成』(初版 1868)「英語の部」採録の聖書用語と(KJVの訳語)とヘボン手稿 Matai den fuku-in sho の訳書との関連を発表した。「馬可傳」についても調査することを筆者の今後の課題としたい。

『馬可傳』(1872)の訳語が、ヘボン、ブラウン個人訳「約翰傳」、「馬可傳」を含め、それらを受け継ぐ形の翻訳委員会社中訳、明治元訳、大正改訳、口語訳と辿って、現在われわれの用いている「新改訳」や「新共同訳」の訳語としてそれらの多くがそのまま受け継がれているという事実に感嘆する。

結語として、「馬可傳福音書」が1872年(明治5)年に翻訳出版された意義は何か。それは何よりも、この訳書によって日本人が日本語でもって「マルコ福音書」を読むのを可能にしたことにあるのではないだろうか。さらには、そこに現れる聖書(キリスト教)用語が、時代を経るにつれて、日本社会におけるキリスト教の普及、受容にしたがい、日本

など、従来教育の変更に踏み切らねばなかった。フェリスが他より遅く指定申請に踏み切るのは、関東大震災により自前の女子大学構想が潰えたことで、中等教育主体の学校として再建のめどが立った1927（昭和2）年である。

まもなく戦時時期に入るが、財団法人化やミッションとの断絶、校名変更や御真影下附等々、キリスト教学校ならではの試練については、要約を省く。また本発表では、『キリスト教学校教育同盟 100 年史』編纂過程で、私がまとめた大正～昭和期の同盟会資料等による「訓令 12 号」をめぐる問題、それはキリスト教学校にとって一体何であったかのを、フェリスの歴史と重ね合わせて総括する事を試みた。

『山本秀煌とその時代』を出版して

岡部一興

皆さんがどれだけ山本秀煌の名前を知っているかわかりませんが、内村鑑三や植村正久のようなネームバリューはありません。内村は何十巻もある全集があるし、植村にしても本は出ているし、研究者も多くよく知られている人物である。しかし山本秀煌はというと、ほとんど知られていない。伝記はないし、彼に関する本は出ていない。知られざる人物である。今回1冊の本になったことによって彼の生涯が明らかになってよかったですと感謝している。このように沢山の人物が歴史のなかに埋もれたままになっていることが多い。山本は牧師から神学校の教授になった人物で、単行本だけでも16冊の本を書いている。その活躍は目を見張るものがあると言える。私がなぜ山本秀煌と出会ったのかということであるが、大学時代にマックス・ウェーバーに関心をもったことがキリスト教史を研究する契機になっている。

私のことで恐縮ですが、小学校6年の時父が脳溢血で倒れ帰らぬ人となった。私の家は食堂を営んでいた。もしかしたらコックになっていたかもしれません。というのは高校卒業したあと家で5年間働き、23歳の時大学に入ったことでもわかるように人より遅れているのである。私は大学に行くはずではなかった。結局長男が家業を継ぐようになった関係もあって大学に行くことになった。

大学1年の時、母を亡くした。父親亡き後私たちが育ててくれた母の死は、私にとって大きな衝撃で

あった。一時は大学をやめようかと思ったが、折角入ったのだから卒業しなければという思いが強くなって、アルバイトをしながら通学することになった。アルバイト先で昼休みに卓球をやったのが切っ掛けで親しくなった友だちがいる。坂田史郎君と言って信濃町教会の信徒で、熱心なCS教師であった。教育実習をした時、2週間坂田家に寝泊まりし、また勝手に押しかけて夕食の御馳走になり、坂田さんの家族のような生活をさせてもらった。ある時私に「家で家庭集会をやるので出席しないですか」という誘いを坂田の小母さんに言われた。これがキリスト教との出会いである。お世話になっている立場上、断るわけにもいかず出席することにした。毎回隅っこの方で黙って座っていたという感じであった。

2年の秋にゼミナールを取るかとらないかという時に、アルバイトで忙しいからゼミを取るのを辞めようと思った。今、思い出すことができないが、なぜ見ず知らずの私に声をかけてくれたのか分からないが、とにかくゼミを取った方がよいと私を説得した者がいた。ゼミを取らないと大学に来た意味がないと言われた。その友人は新屋重彦さんといってSCAに所属、高谷ゼミで一年先輩であった。その後彼と親しくなるのだが、惜しくも2011年3月に肺炎で亡くなった。彼は成蹊大学の教授で社会学を教え宗教社会学を専攻していた。とにかくまだ募集しているゼミがあると誘ってくれて、高谷ゼミナールを受験した。そしてマックス・ウェーバーを研究する高谷ゼミナールに入った。高谷ゼミナールとは高谷道男先生と言って、私たちの教会の長老でヘボン研究のパイオニアである。

ある時、ゼミナールが終わって学生が高谷先生にお茶を飲みに行きましょうと先生を誘った。ヘボン館の前のヘボン銅像の前で、先生が転んでしまった。「先生大丈夫ですか」、「うん大丈夫」、先生はうしろを振り返って笑った。学生の心配した顔とは別に、先生は「やはり私はヘボンだね」と言ってニコニコしていたのを思い出す。1966年12月のクリスマスに村田四郎牧師から洗礼を受けることになる。そのことを書くと、長くなるので別の機会にしたい。

私はイエス・キリストの父なる神に私を導いた不思議な力はどこから出て来たのか。何故多くの方々が、主なる神に導かれたのか、そのルーツを探究したいということからキリスト教史に関心を持つようになった。高谷ゼミでは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を読み議論、世俗内的禁欲

の中から生まれたエートスが、合理的経営を内面的に促進し作用したというあの論調は私の心に突き刺さった。では日本におけるキリスト教の受容はどうであったのかというテーマが与えられ、大学院で工藤英一先生に師事した。その後色々な教会を訪れては資料を見せてもらい、ミッション・レポートを直に調べるなどオリジナルな資料を調査することの重要性を両先生から教えられた。

ところで、今回まとめた『山本秀煌とその時代』は、前述したように内村や植村のように注目されずに来た人物ではあるが、研究に値する様々な業績を残している。彼は受洗するや熱心な信仰生活を送り、ブラウン塾から東京一致神学校に学び、麹町教会の形成に関わり、埼玉県の和戸において夏期伝道を行ない教会創立の契機となる働きをした。また在学中に3年余りにわたって名古屋伝道に関係し、名古屋教会の基礎を作った。その後フェリス女学校に奉職、高知教会に着任した後、指路教会を14年間牧会した。高知教会では民権運動家が挫折するなかで、教会に留めおき急激に教勢を上昇させる働きをなし、指路教会では日本で有数な教会へと成長させた。

その後オーバン神学校に留学したのち山口教会、大阪東教会を歴任、明治学院神学部の教授に迎えられた。神学部時代にはキリシタン史とプロテスタン史の著書を数多く出して両研究において先駆的な働きをした。そして晩年高輪教会を牧した。指路教会から離れて赴任した山口教会、大阪東教会、高輪教会での牧会を見ると、牧師が責任を取って辞めたり、長老と牧師が対立、青年会を中心として牧師と対立するなかで牧師が辞任するといった教会に派遣されて、教会の立て直しを図る重要な働きをしているのを見ることができる。

さらに宗教法案や宗教団体法案の反対運動において委員長となり、中心的な働きをした点においても評価しなければならない。日本のキリスト教は日中戦争から太平洋戦争にかけて宗教団体法の挑戦を受け、いわば政府の圧力によって日本基督教団の成立を見た。しかし、それにいたる過程において山本秀煌らを中心として大正から昭和にかけて注目すべき戦いがあったことを忘れてはならない。

「安部正義 オラトリオ 《ヨブ》

－ 日本人による最初のオラトリオ－

2012年11月17日、「レクチャー・コンサート」

という形で明治学院歴史資料館主催、明治学院大学キリスト教研究所と横浜プロテスタント史研究会の共催で行なわれた。場所は明治学院大学白金校舎のパレットゾーン・アートホールで行われ、講師は西南学院音楽主事の安積道也氏による分かりやすい解説があった。

かつて明治学院高等学部教授の安部正義という人がオラトリオ《ヨブ》を作曲、これは日本における最初のオラトリオ作品と言われる。当日配布された明治学院歴史資料館調査員の加藤拓未氏の記述によると、安部は1891年5月に仙台に生まれ東北学院中学部で学び、ボストンのニューイングランド音楽院に入り、1926年同音楽院教育科声楽のディプロマを取得、卒業して帰国した。安部正義は1930年～45年にオラトリオ《ヨブ》を作曲して敗戦の頃完成したが、出版は遅れ1965年12月になされた。演奏は67年5月明治学院チャペルで池宮英才の指揮、園部順夫のオルガン演奏、明治学院大学グリークラブの合唱で全曲演奏がはじめて行われた。他にも2回演奏され、1975年を最後に演奏が途絶えていたが37年ぶりに再演された。

西南学院音楽主事の安積道也氏の指揮と解説、ソプラノ、メゾソプラノ、テノール、バリトン、バスの5人の歌手が登場、ピアノの伴奏に合わせて歌った。ヨブ記の物語にそって曲が歌われ、安積氏の分かりやすい解説と相まって素晴らしい演奏を聴くことができた。出席者は約240名であった。なお、この11月に行われたコンサートは横浜プロテスタント史研究会の第340回の例会を兼ねている。

(岡部一興 記)

会員著者紹介

『バプテストの大阪地区伝道 1888-1940年』

大島良雄、ダビデ社、2012年11月30日

『山本秀煌とその時代』

岡部一興、教文館、2012年11月30日

【編集後記】

東日本大震災が起こってから2年が過ぎました。衆院原子力特別委員会が4月8日、2年経ってようやく開催されました。特別委員40名中24名が自民党議員、この中には選挙区で原発を抱える委員が6人、原発推進派も入っています。脱原発派の河野太郎氏は委員入りを希望すれど選ばれず。このことを考えても後ろ向きな委員会であることが分かります。し

かもこの委員会の次の開催日程も決まっていないという。長期的展望をもって原発の問題を考えて行かなければならないことが問われています。

ところで、ここに会報 52 号をお届けしますが、原稿をもう一つ依頼すべきところをしなかったので、会報の割付けに大きな穴を空けてしまいました。順番から言えば2月の発表者の要旨を掲載しなければいけないところでしたが、原稿がありませんので申し訳ありませんが、4月に発表した岡部の原稿を掲載させて頂くことになりました。(岡部一興記)